潮　流

筋違い

8月お盆で帰省（群馬県松井田）した。遅れに遅れた梅雨が明けた8月初め2～3日の猛暑でやっと夏本番到来かとの期待は見事に裏切られ、お盆中は雨続きの肌寒い毎日。聞くともなくニュースに耳を傾けると、第2四半期のGDPがプラス0.6%と、一方百貨店の売上は連続20カ月前月割れと報じていた。景気ということで聞けば後者の話は気が滅入ること間違いなしで、どうも夏らしくない天気のせいもあって日本全体意気あがらずというのが大方の気分の正直なところではないか。

加えて、メディアや政治方面の方々から「最近の農林水産官僚とかけて、解説と評論と解く。その心は、何もない、空虚。」と言われ、更に気分が滅入った。この方々はWTO農業交渉への対応振り、更には国内政策転換･改革のスピードに関する思いをこのような遠回しの表現で語ったのであろう。痛烈な皮肉である。

いや、99（平成11年）7月に食料・農業・農村基本法制定後、この新基本法の具現化に向け、省を挙げて取り組んできているし、更にこの新基本法の理念を国際ルールに反映させるべく、前回のUR農業交渉の猛省の上に立ち、国民合意、国際的仲間づくりプロセスを経た日本提案を00（平成12）年暮れに関係閣僚会議で決定し、交渉に全力を挙げていますよ。現に1年半程前、農業の構造改革を加速化、食の安全と安心の確保、都市と農山漁村の共生・対流を柱に据えた「食と農の再生プラン」を公表し取り組んでいるではないですか。と反論を試みた。

今年の農業白書を読んでご覧。農政の本筋である、再生プランの柱のひとつである農業の構造改革についての記述振りを。この再生プランで指摘している、農地制度の見直しに着手とか水田農業の改革と整合性をもった経営所得安定対策のあり方の結論を提示します、に関する記述など一言半句も出てこないし、この再生プランの存在自体意図的にと言われてもしょうがないほど消し去っているよ。再生プランが出て1年半余り。16年度概算要求の中にも音沙汰なし。「基本計画見直しに着手」を殊更に宣伝しようということのようだが、これは新基本法上当たり前のこと。国内外の情勢に対応した農政改革の緊要性についての基本的認識において正に筋違いと指摘せざるを得ない。政策転換の決定的遅れをごま化すための官僚の猿ヂエと言われても仕方ないよ。

「注」　筋違いとは、道理にはずれること、見当違い、手続きの違うこと。（旺文社：国語実用辞典）

だが、現役が精一杯頑張っていることは間違いない。いろいろな情報を分析・検証しながら進めているからそう見える面もあるのでは。確かに現役とOBの差はこの情報量の決定的な差といってよい。仮にOBに現役よりましなところがあるとすれば、永年の行政経験の中で培った感性であろう。その感性は、瀕りとこれまで、WTO農業交渉において我が国益を反映した日本提案の実を確保するために、また交渉担当者が交渉の場で実力を存分に発揮し得るためにも、農政の本筋、本道の「再生プラン」でいう政策転換の内容を透明性のある形で明確にする（既に明確にされていなければならない）ことが大事と、訴え続けている。UR農業交渉の反省点はいろいろあるが、最大のもののひとつは国内政策の大転換が必要になっていたにもかかわらず、その受け皿が出来ていなかったことであろう。

今回のWTO農業交渉への対応・準備は正にこの反省の上に立って取り組まれてきた。

時しも8月14日WTO農業分野において米・EU協同提案が、8月24日にはカスティーヨー般理議長案が出された。途上国、NGOの影響力がURの時とは様変わりに強まっている中で、9月10日からのカンクン閣僚会合は結局決裂したが、政策転換の緊要性は、国内農業を巡る厳しい情勢、FTAなど多様化する国際的課題への対処の必要性から、一段と高まっている。筋違い批判は的外れだったと笑えるよう、奮起を期待したい。

（理事長　高木　勇樹）